

寄せ場学会通信 ³ 1988年3月

連絡先
167 東京都杉並区善福寺2-6-1
東京女子大学松沢研究室気付
電話 03-395-1211

迫る!

日本寄せ場学会 第2回総会

ところ・京都大学楽友会館

(京都市左京区吉田近衛町 Tel.075-751-1100)

あし・京都駅から=市バス206番(東山通経由)近衛通下車
四条河原町から=市バス201番(百万遍方面)近衛通下車

4月2日(土)

12.00 受付開始

1.00~ 総会——活動報告、決算など

2.00~ 記念講演

「京都近代の被差別部落および現代の差別」——師岡佑行

3.00~ 研究発表

1.「山谷調査報告」——西沢晃彦・布野修司

2.「アルジェリアからの移民労働者の現状」——洪 性鎮

6.00~ 交流会(場所は楽友会館)

4月3日(日)

5.30~ 京都の「寄せ場」現地確認

9.00~ 総会——1988年度活動方針、人事、予算など

10.00~ 研究発表

3.「〈問題〉としての日傭労働者——大阪市労働調査報告

『日傭労働者問題』をめぐって」——平川 茂

報 告

釜ヶ崎労働ゼミの成果——西日本事務局

やど・4月2日の宿泊は京大客室に用意します。人数制限がありますので、希望者は西日本事務局(高槻市日向町7-15 Tel.0726-76-2549 島方)へ申し込んで下さい。

「光る爪」の国からの便り

スクオッターを歩いて寄せ場を考える

青木 秀男

寄せ場学会の会員の皆様にはお元気で活躍のことと存じます。

私、去年の9月末にフィリピンに来て、早や三か月半が過ぎました。タガログ小説「光る爪」の国です。毎日驚きと感動の連続で、日の経つことの早いこと。

フィリピンの新年はすさまじい花火の音で始まりました。大晦日の夜から元旦の朝にかけて、マニラは空襲を受けたような火薬の炸裂音と硝煙に包まれました。中には銃を撃ち放った者もあるそうです。私たちは驚き、窓を閉めきってただ経過を見守るばかりでした。メトロ・マニラ（以下マニラ）だけこの日の死者が一五人。けがをして病院で手当をうけた者が一、七四八人。内、重傷者が一五四人。フィリピン人好みの伝統のお祭り騒ぎとはいえ、すさまじい数字です。私たちは炸裂音を聞きながら、フィリピンの民衆のどこへもっていきようのない時代の欲求不満の深さを感じたものでした。アキノ政権を登場させたピーブルズ・パワー（人民の力）とは、このエネルギーだったのかもしれない。

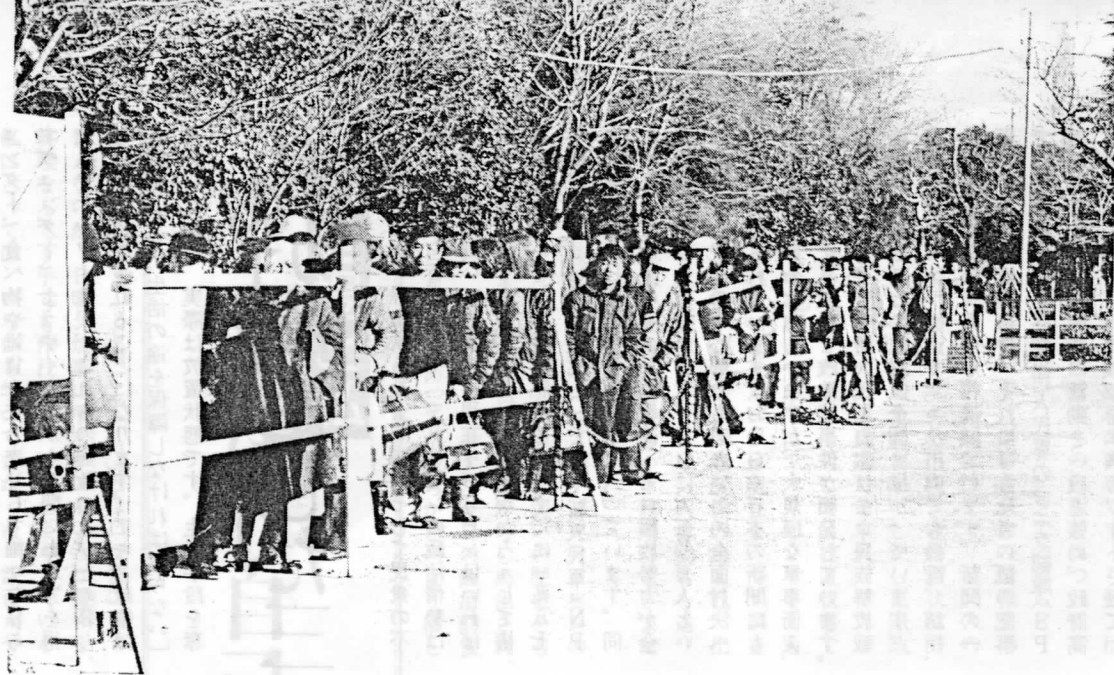
一九八六年二月、アキノ政権が成立してもうすぐ二年です。しかしフィリピンが抱える問題は何一つ解決していません。かのピーブルズ・パワーの成果が今、壮大なゼロと化しつつあるかのようにみえます。インフレーションは収まることなく、物価は上

昇するばかりです。農地改革のかけ声はすれど、いっこうに実現の兆しはみえません。むしろ農地は集中しつつあります。地主・自作層三〇%、小作層二〇%農業労働者五〇%という階級構成。それはまぎしくコミュニティの階級的基盤です。地主や資本家に土地を売り、また奪われた農民が仕事を求めて都市へ流れます。しかし人口七三五万人のマニラはすでに人口の過密状態です。まず、資本力の弱いマニラに出てきても、仕事がありません。フィリピンの失業者は全労働人口の二・三%（一九八七年）、半失業者は三三・六%です。マニラではこの数字はさらに上まわり、失業率は一八・六%に達します。アーバン・プアと呼ばれる都市下層民の失業率はけたはずれのものになります。私が入っているスクオッターの場合、五四世帯の内、定職をもつのがわずか五世帯という状態です。しかし人間、仕事がなくとも死ぬわけにはいきません。人びとは生活の糧を求めて働きます。ウェンダー（食べ物・雑貨売り）、スキヤウエンダー（道路清掃人）、ジブニー（乗り合いジープ）やトライシクル（客席付モーターバイク）の運転手、ガードマン、店員、工員、日雇労働者、メイド、ホステス、ストリート・ガール、そしてもの乞い。人びとはどんな仕事にもとびつきます。仕事がない時は自分で作ります。クリスマスから新年にかけて、マニラにもの乞いが増えました。この期間

は彼らの稼ぎ時です。通行人に手をさしのべて金をねだります。外国人はカモとなります。暗い夜道にはホールド・アップ（辻強盗）が出没します。繁華街エルミタにはストリート・ガール（売春婦）が並びます。ニキロメートル程のエルミタ通りに約五〇〇〇人の売春婦がいるといわれます。クラブやキヤバレーではカウンターの上でストリップ・ダンスが踊ります。

フィリピン人の海外出稼ぎは、国内の雇用機会の少なさの一つの反映としてあります。英語を話せる若者たちが海外に仕事を求めます。外貨獲得のために政府がそれを奨励します。現在、世界の一二五カ国に一〇〇万人が出ているといわれます。日本への出稼ぎはその一つです。マラテ、マカティに出稼ぎ労働者送り出しの会社が繁栄します。

アーバン・プアのほとんどは農村出身者です。マニラ人口の八〇%以上が農村出身といわれます。彼らはマニラへ出て来ても住む場所がありません。土地を買う金はもちろん、借家に入る金もありません。かくして多くの人が狭い空間にひしめかれています。マニラ人口の二五%がスラムやスクオッターに住みます。スクオッターとは居住権をもたない人びとの「不法占拠」地区のことをいいます。河川敷、海岸沿い、鉄道沿い、ゴミ集積地、公園、空地、道路沿いにほったて小屋同然の家屋が「昔のように」



現われます。マニラに大きいスクオッターだけで四五地区あります。これらがマルコス政権の礎を崩したピーブルズ・パワーの主力、アーバン・プアーの居住地区であるわけです。

貧困はさまざまな悲惨を産みます。人びとがそれらの悲惨に負けずに生きぬいているとしても、その暮らしは大変です。このことは例えば貧困の犠牲者としての子供たちの状況を見てもあきらかです。フィリピンでは多くの子供たちが学校へ行けないで働いています。しかも彼らの労働条件は一般に劣悪です。最下層の子供たち、ストリート・チルドレン(街頭の子供たち)はマニラだけで四五、〇〇〇人いるといわれます。家族が解体した子供、家から追い出された子供、家族の生計を支える子供。彼らは路上で働きます。タバコ売り、新聞売り、花売り、スキヤウエンター、車の窓拭き、靴みがき、かっぱらい、もの乞い。その内の三〇%近くが子供売春をしているといわれます。客のほとんどは外国人です。マニラ、オロンガポ、バグサンハンを中心に全国に二〇、〇〇〇人の売春の子供がいるといわれます。その年齢は六歳くらいから一四―一六歳をピークとします。男児も女児も関係なしです。子供を「買う」外国人の醜態と同時に、親が納得づくで子供に売春をさせてその金を当てることまで、貧困は人間を台なしにします。去年オーストラリア人の医師が七歳の少女を強姦のうえ殺害したが少女の親と二〇、〇〇〇ペソ(約一四万円)で和解したという事件がありました。これはさすがに酷い人権団体から非難されて、今その医師は告訴されています。私たちはこの事件にフィリピン人の貧しさと外国人の収奪の構図をはっきりとみてとることができま

ところでアキノ政権はこのようなフィリピンの状

態の解決をめざします。しかしアキノにはその力がないというのが実情のようです。アキノは貧困問題の解決を政策の筆頭に掲げてはいます。しかし政情の安定化をテコに外国資本の導入をはかってフィリピン経済を上昇させるというアキノ目論見は、そう簡単には実現しません。インフレーション、倒産、失業についての民衆の実感としては、むしろマルコス時代よりも悪くなったとする者が少なくありません。民衆の中に依然としてマルコス派が浸透している原因はこの辺りにあるのでしょうか。政治的自由についてはアキノ政権は「前進」したといわれますが(現在後退しつつあります)、その日暮らしの民衆にとつては、政治的自由の問題は第二の問題にすぎません。まずは何とか食べることに、これこそ彼らの最大の関心事なわけですから。「合理的」な体質をもつアキノ政権だけに、経済問題や社会問題についての政策には迷いがなく、むしろ強引という印象さえします。例えばアキノ政権はスクオッターの撤去政策はとらないという当初の約束にもかかわらず、この二年間にすでに四六カ所のスクオッターが撤去作業をうけています。この一月一八日に地方選挙がありました。この選挙後には大規模な撤去政策が強行されるだろうというもつぱらのうわさに、民衆の不安が高まっています。今日のスクオッター撤去は多くの場合、再居住区をあてがうわけでもなく、仕事を保障するわけでもなく、ただ出身地へ帰る旅費と当座の食べ物を与えて、うむをいわず追い出すというものです。低コストの住宅づくりも多くは中流階級の人びとを利するだけという結果になっています。また美しい街づくりという名のもとに、市内のゴミを大型ダンブカーで収集する。路上のウェンダ―を排除する。スクオッターを撤去する。しかし手押し車でゴミを収集して再生資源をさがすスキヤウ

エンター、食べ物や雑貨を立ち売りして細々と暮らすウエンター、ようやくわずかな空間にわが家を得たスクオッター住民、これらの無数の人びとの暮らしは即座に壊されることになりました。アキノ政権は「別途、彼らの生活の途を保障しなければならぬ」といいながら、実際は放置状態です。生活手段を奪

私が設定した二つの調査課題

経済的窮状、堆積する社会問題、そして民衆の不満。これらを背景として、フィリピンの政治情勢は大きく揺れ動いています。現在フィリピンはいわば内戦状態にあります。アキノの人氣がかううじて権力を支えているといった感じですが、すでに一九八七年春にフィリピン共産党(CPP)、新人民軍(NPA)がアキノ政権との全面戦争に入っています。同じくミンダナオのイスラム教徒・モロ解放勢力が全面戦争の宣告をしています。さらに六五〇万人といわれる少数民族の中心部分もアキノとの全面対決への決断を迫られています。おそらく日本の新聞にも報道されているとおもいますが、大規模な軍事衝突、それに関連する大きな政治的事件が頻発しています。政府軍(AFP)と新人民軍およびモロ民族解放戦線(MNLF)との戦闘は全国に広がっています。戦闘は首都マニラに迫りマニラ市内でも最近、誘拐テロリズム、爆弾事件が相次いでいます。新聞の一面は各地での衝突事件、それによる死者の数の記事で埋められます。最近、新人民軍のマニラ部隊(SPARROW)が市内での活動を一段と強め、政府高官や軍人・警察官への攻撃をエスカレートさせています。米軍基地への攻撃の可能性をも予感して、新

われた人びとがむしろ増えていくというのが、今日の都市政策の帰結です。行く当てのない路上生活者がマニラ市内のいたるところにみられます。民衆の中のアキノ人氣は今なお高いとはいえず、他面、経済問題、社会問題の泥沼の中に民衆はより深くひきこまれていっています。

聞は第二のウェトナム戦争への危機を報じています。マニラは政治と軍事の戦略拠点です。一方でアキノ政権への憎しみからマルコス忠誠派が暗躍します。マスコミはマルコス派をけん制しながら、コミュニケーションを叩きます。警察と軍がゲリラ狩りを進めます。

最近、「平和と民主主義のためのマニラ十字軍」なる反共武装自警団(ウイジランテ・グループ)が、警察の指導のもとに組織されました。たちまち三、〇〇〇人の市民「ボランティア」がこの組織に加入、銃器の訓練をうけて、全市内に匿名で配置されました。グループの背後にCIAが暗躍しているともいわれます。昨秋のクラーク米軍基地兵士の狙撃事件以後、「アカ狩り」旋風はここまです。農村地帯は新人民軍との戦闘の只中にあります。それだけにウイジランテ・グループの行動は残酷を極めるものようです。彼らの暴力から逃れてレイテ、セブ、ミンダナオから多くの住民がマニラへ流れてきています。いわば政治的「難民」です。アキノ政権の右傾化に対応して、マルコス派―ホナサン一派とアキノとの確執は後景に退きました。今フィリピンではだれそれがコミュニケーションであるということばはタブーです。コミュニケーションのみならず、より広汎なりべ

ラリスト、人権主義者が攻撃される日がそう遠くないという予感がします。マルコス時代への逆行が、第二の革命か。今日もマニラのスラムでコミュニケーションとマルコス派の暗躍がくり上げられています。

一月一八日の地方選挙はフィリピンのこの政情を端的に表現しています。メトロ・マニラの四市を含む全国三五地域が中央選挙管理委員会の直接統制に置かれ、軍の監視のもとで投票が行われました。一八日の選挙を断念して延期された州が一、市が三。一二月一日以来の選挙キャンペーン期間中に殺された人が八四人(おもてに出たものだけ)。内、候補者が三十八人。負傷した人が六十三人。誘拐された人が二人。これらの数字がアキノ政権の権力の実態の一切を物語っています。

さて、今回のマニラ滞在中、私は三つの調査課題を設定しました。それらは研究というにはあまりにも範囲が広く、またタガログ会話のハンディのため、実際はそれらの表面をなぞること以上にはできないと思います。しかしせつかくのチャンスです。がむしゃらに歩きまわり、人に会い、尋ね、聞き、書き、手当たり次第に資料を集めたいと思います。

三つの課題とは次のようなものです。第一にスラム、スクオッターの実態を知ることです。私は現在スモーク・マウンテン、タタロン、ダマランヤギの三つのスクオッターに入っています。いずれもマニラでは有名なスクオッターです。それぞれ異なる地域環境に位置するスクオッターで、互いに比較することも面白いのですが、その前にマニラのスクオッターの形成過程、社会構造の全体像をつかむ努力をしたいと思っています。そして日本の寄せ場との比較、すなわち両者の形態の違いと構造的な関連性を探りたいと思います。寄せ場の労働者とスクオッターの民衆は、アジア経済のメカニズムの中できっちりつ

ながっているというのが、私の実感です。第二は、海外出稼ぎ問題、とくに日本への出稼ぎについてです。出稼ぎ者の出身階層、フィリピンでの暮らし、出稼ぎのルート等について、当事者からの情報を得たいと思います。マニラの新聞にはフィリピン人の出稼ぎについて、また日本への出稼ぎ者の窮状についての記事がしばしば掲載されます。しかし実際政府は出稼ぎを外貨獲得のため奨励こそすれ、フィリピン労働者の外国での窮状に対しては放置状態です。出稼ぎ者の実態についてはフィリピンでさえもあまりつかまれていません。私は現在ようやく調査に入ったところです。出稼ぎ問題関係の出版社、出稼ぎ労働者の支援団体、フィリピン労働者を送り出す日本人業者に面接をしたという段階にすぎません。すべてこれからです。

第三は少数民族問題についてです。フィリピンの少数民族もまた中央権力との凄絶な闘いの歴史をもっています。また現在も祖先の土地からしめ出され、文化を奪われ、差別されています。今日の政治的変動のフィリピン社会にあって、彼らがどのようにし

てアイデンティティをとり戻すか。彼らの闘いが全体の闘いの中でどのような位置を占めていくか。これもまた、フィリピン社会の分析にとって重要な課題であると思います。調査は現在、少数民族の解放団体の人びとと何度か話しあったという段階です。

「ひよ」の交流で

これら三つの課題について資料を集め、分析して、何らかの理論的、実践的な方向性を探ることがマニラ滞在の目的であることはいまでもありません。しかし私の目的はもう一つあります。それは資料集めの過程で多くの人に出会うことです。そしてフィリピンの人びとの生活と闘いに触れ、それらに学ぶことです。同時に日本の現実を正しく伝えて、「ひと」と「ひと」の交流と連帯をめざすことです。実はこちらの方が私にとって面白いものになりそうですし、なつてきました。もちろん私の関心に従ってですが、

日本の寄せ場や被差別部落の人びととその闘いを正しく伝える中でその人びとの「ひと」としてのホコリをきちんと伝えたいと思います。このことなくして私の調査はありえないし、交流や連帯なるものは不可能だと思っています。

研究にせよ、ささやかな交流活動にせよ、実質これからのことですが、フィリピンの人たちと「心を合わせて」がんばりたいと思います。それらの成果をたのしいおみやげ話として、またリポートしたいと思います。今回はその前段の報告にすぎません。

フィリピンはこれから夏です。しかし暑くともさわやかです。貧しくともあかるく、情熱的でダンスが大好きなフィリピン人。いい男のフィリピン人、いい女のフィリピン人たちの中で暮らせることは本当に幸せです。フィリピンへ来てよかったとしみじみ思います。

季節は冬でも、心は春と信じます皆さまのご活躍を心からお祈りいたします。

(マニラにて 一九八八年一月)

寄せ場と私

あーやっばり自己満足か、でも

西山アユリ

「炊事班はとっても楽しかった」とは口が裂けても言えないが、日頃、炊事に手をかけることが嫌いな料理なんて下手でも作れればいいんだと考えている私にとっては、いろいろ学べてよかった。数百人分の飯を炊くことがいかに大変なことか、大根の切り

方ひとつで「方針」の相違により論争が起きたり、ネギのみじん切りが遅いことで若者たちが師の教示に耳を傾けたり、手もちぶさたでポーツとしていたりすると「サボってる」と言われたり、女の子は洗い物、男の子は力仕事というしきたりがまかり通る

ことにドキツとしたり、ママレモンの渦を見つめて「これで革命とかできるのかな」と思ったり、古株と新入り、先生と生徒という命令系統が無言のうちにてきていることは驚きであった。不平不満はつきないとしても、端から見れば私は「支援」のくせにふまじめだっただらうなと思う。

私は初日から元日の朝までいたが、いればいるほど「ふまじめ」を私がここに何日いたって「一人の野垂れ死も出すな」というスローガンのために何か役に立っているとは思えないという自虐的気分がさせられてきて、ここにいること自体おかしいんじゃないか、あーやっばり自己満足するためにきたお嬢



さんにすぎないじゃないか、つまんないのという考
えにいたって、撤収の日までいようとも思ったが(と
いうのは、私にとつてこの越冬闘争の中で一番リア
リティというか実感があつた時間とは、人民パトロ
ールに行つた時と、炊事班の仕事の合い間などにお
つちやんたちといろんな話をしたり、聞いたりする
時だったから、もっと人パトに行きたかつたし、話
したりしたかつたので、ついに元旦の朝、同じくト

ンコせんとするおつちやんといっしょに玉姫から抜
け出してしまった。電車の中でおつちやんはハイリ
キをおおひながら「オレはやりたいうにやつて生
きる！」と叫んでいたが、私も玉姫から出てきてこ
うして彼と向き合つて新しい年を迎えるということ
が何だか妙に嬉しくて、越冬に行つてよかつたとし
みじみ思つた。

が、人パトに行つても、私は本当はこんなことを
しているべきじゃないなどと後で暗くなつて考えて
しまった。それは、生きるために日々闘つている人
間のために、そうでない、勇気のない人間である私
が「支援」している錯覚に陥つている後ろめたさだ。
自分のことと山谷の状況とを結びつけて悩んでるな
んて、現場でがんばっている人から見たらバカみた
いだろう。
山谷の外でもできることをやればいいという。労
働者と話してそこから得るものがあればいいという。

寄せ場と私

表情と言葉を要約しないこと

水島 陽

深く考えず集会に行つたりデモに参加してみればい
いという。——しかし、山谷に行つておつちやんた
ちと話す、すべて自分にはね返ってくる。「お前は
何なんだ」と。
私はたぶん、まず自分が生きるために闘つてみな
ければ、山谷の日雇労働者や野宿を強いられる
労働者のためには、彼らの敵にならないにせよ、「支
援」や「闘争」に加わることはできないのだ。山谷
の状況を目の前にして、支援に加わるべきかべきで
ないかなどと悩むのは甘っちょろいかもしれない。
しかし、私はいつまでも「お前は何なんだ」と問わ
れ、返す言葉がないという状態を続け、時々山谷に
行つて自己満足を得るといふことを続けているわけ
にはいかない。自分の闘う現場をもつこと——敵は
同じなのだから——そこががんばることが私にでき
る最大の支援ではないかと思つている。

(大学生)

年が明けて三日経つ。アベックの集う山下公園を
毛布とスリーブと衣類その他を持って四人の男が歩く。

「先輩、野宿ですか」

ベンチに座っているひとりの日雇労働者に声をか
ける。話しかけかたと目の位置とが、相手との関係
を決定的にする。敵か味方かを判断するのは、私で

はなく彼のほうなのだから。

横浜スタジアムを追われ野毛のヤブの中で暮らし
ているという。通行人の立小便の責任をとらされて
スタジアムから出されたらしい。その経過を詳しく
聞いたあと、ヤブの中の暮らしに話はずむ。この
時の彼の表情のなんとも形容し難いこと。人間の尊

釜ヶ崎労働ゼミの案内

釜ヶ崎は労働者の街であり、釜ヶ崎に取り組むにあたっては、労働を基軸にした視点を取り組む側が充分に獲得しておく必要があると考える。

労働を基軸にした視点とは何か。就労構造や労働環境などは資料を駆使して合理的に説明しうるであろうが、その中で反復して働き、生活の糧を得ている労働者を『獲得』することはできないであろう。「日雇い」という雇用形態、就労にあたって必然化されている人夫出し・手配師の存在、現場における現場監督などとの不明確な位置関係などが労働者の中に刻印するもの、それらにとりこまれ反発する労働者の姿として様々な生活・行動上の現れを見ること、それが、労働を基軸にした視点であろうと思う。

かかる視点を釜ヶ崎労働者ならざる者が持つこととするのは、非常に困難なことであるが、労働者との交流による追体験、あるいは疑似的日雇労働体験、それらを踏まえた良質な報告を媒介とする追体験によって一定程度はなしえるものと考えられる。「体験者」の質の問題もあり、「体験」によって獲得された視点は常に釜ヶ崎の労働者の前にさらされ、相互に検証することに確認と共有が計られる必要がある。

以上の作業は「寄せ場学」の基礎におかれるべきことであり、現実のものとして取り組まなければならないものであるとの認識のもとに「釜ヶ崎労働ゼミ」が計画された。

予定表

3月14日(月)午後1時集合

参加者交流・現地団体との交流・「土方学入門」—
就労方法・現場のいろいろ

15日(火)午前5時起床 センターから就労
午後8時—労働問題学習会

16日(水)午前5時起床 センターから就労
午後8時—釜ヶ崎の歴史学習会

17日(木)午前5時起床 センターから就労
午後8時—福祉・医療問題学習会

18日(金)午前5時起床 センターから就労
午後8時—釜ヶ崎の現状学習会

19日(土)まとめ・体験交流

* 宿泊は出来れば簡易宿泊所(ドヤ)を準備したいと考えています。食事は各自、釜ヶ崎内の食堂で。参加費は5,000円(旅行者保険加入費用含)、就労日毎にカンパ(未定)。女性の参加者も可、労働体験は出来ませんが現地で活動しているキリスト教の現場での仕事に参加するとか、行政や各種団体を回って調査活動を行うとか、就労しては把握できない釜ヶ崎の別の面に取り組むことが出来る。募集人員20名。

厳を聞いて生活している自負と、現役でなくなつたうしろめたさがひとつの顔に同居している。

対話の途中で何をか言いかけて、やめる。話が乗ってきたところで身ぶりも次第に大きくなり、さあこれからという時になって話が止まってしまふ。

黙るな。そこで黙っちゃだめだ。しかし対話は沈黙の底無し沼に引きずり込まれていく。彼から言葉を奪っているのは誰なのか。何をささやきたいのか。誰に対して叫ぼうとしているのか。

「なぜ山下公園へ」

「いやあ、ちょっと散歩にね」

と彼は彼は大槓橋埠頭の方向に首を向けた。自分が船舶の現役だった頃を思い出しているのだろうか。

また沈黙だ。寿という町に足を踏み入れて九年経

つたが、いまだにこの壁を私の方から破ることができずにいる。

寿には識字学校がある。文字を自分のものにしたと言いだした勇気が集まって出発した。私はここ数年まったく出席していない「不良生徒」であるが、識字学校で教えられたことは多い。

日雇労働者がおのれの生活史を書く。しんどい思いを書く。文字を知ることが「沈黙の文化」を自力でかみくだき、のりこえていく(大沢敏郎)ことであるときに、私の識字は「精神的沈黙」の対象化—

—自分の使う文字が自分のものになっているか、それは文字を識ろうとする人間の言葉とどこでどうふれあえるのか—としてのみ成立する。文字を知らず身体で社会やおのれを考え感じとってきた(こざ

るをえなかつた)者に、文字だけで物事を考えいてきた(考えたつもりでいた)者の言葉は、まったく通用しない。このことを寿の「おっちゃん達」は今も私に教え続けてくれている。

寄せ場という、資本主義の矛盾が集約された場所とか暴動にみられる革命性とか、あるいは別の角度から、人間らしさとかいわれている。しかし、寄せ場での一つ一つの出会いを折り重ねる過程にしか寄せ場との結合の道はないのだと思う。

表情をかき集めて要約しないこと。いきさつも背景も異なる言葉を集計しないこと。

寄せ場に関心を持ち、なんらかのかかわりをしていく者の一人として、最低限そのくらのこざわりは失いたくないと思っている。

(団働務)

事務局から

この一年、無から印した第一歩

日本寄せ場学会は、この四月で創立満一周年となる。この間、東日本と西日本の各支部で例会を積み重ねるとともに、夏は、充実な事前準備のうえに首都・大東京の寄せ場、山谷において地元住民の意識調査を一週間やりぬき、秋には、大阪において多数を結集して結成記念大シンポジウムを多彩な話し手のもとに繰り広げた。この三月には、日本最大の寄せ場である釜ヶ崎において一週間にわたる労働ゼミ（ドヤから現場の日雇労働に出て、帰ってテーマ毎に学習する）を行う予定も、立っている。会内部のコミュニケーションをはかるための『寄せ場学会通信』は、本号を入れて三号まで発行された。年報『寄せ場』は、一方で最後の原稿を入手し、他方で校正段階を迎えており、三月下旬刊行を目指して疾走中である。こうして、全国各地、各分野から百数十名の人びとの本会への参集を得、一部寄せ場―日雇労働者から

働者からは心からなる叱咤激励を、そして多数のひとから無償の協力をもらいつつ、老一壮一青の事務局と運営委メンバーのじつに献身的な努力に牽引されて、日本寄せ場学会はいまようやく、建ち上り、その基本骨格成ったのである。たった一年でここまで来たことのできたのも、佐藤さん、山岡さん虐殺といった寄せ場情勢の急激な悪化に対する強い反発が、多くの心ある人々のうちにあつたからに違いない。

創立一年目は、何も無いところから寄せ場学構築へ向けた第一歩が印された。そのための組織も、ともかくにも動き始めた。それでは次は何か？ 組織が、もう少し多数の、とくに若手の日常的な仕事として運転されること。これが第一の課題である。

第二は、個別研究（者） 結果という初年度の成果を踏まえ、結集した各個別の間でたがいに突き合わせ

を行い、厳しい相互批判を展開していくことが、課題である。それを通じて、学構築へ向けた理論的現実を着実に形成していかなければならない。

キイ・ワードは、〈寄せ場〉である。「貧民（窟）」「窮民」「細民（街）」でも、「木賃宿街」「ドヤ街」でも、「不良住宅」でも、「要保護所帯」「低所得層」でも、ない。まして、「スラム」では、だんじてない。（北米でいう「スキッド・ロウ」とも違う）。この概念を通じて私たちは、日本資本主義経済と市民社会秩序をその底辺と暗部から照らし出す視座を、獲得することができる。貧困問題や福祉政策、あるいは地域と都市計画の問題ではなくて、国や自治体の、労働政策やひいては経済政策一般、あるいは教育・文化・イデオロギー政策総体へとアプローチする回路へ到達すること。そしてそこにおける根本的な問題を抽出すること――〈寄せ場〉はわたしたちを導いてそれを可能にしてくれる。究極的には〈寄せ場学〉は寄せ場の〈解体学〉。ひいては寄せ場をかかえる現存国家・体制の〈解体学〉となるであろう。

来年度はさらなる充実と飛躍を期そうではないか。（事務局長・松沢哲成）



下層社会を照らす
1
寄せ場
寄附先：事務局
〒100 東京都千代田区千代田1-1-1
電話：03-5561-1111
FAX：03-5561-1112
発行：毎月15日
定価：1000円（税別）
送料：別記

寄附先：事務局
〒100 東京都千代田区千代田1-1-1
電話：03-5561-1111
FAX：03-5561-1112
発行：毎月15日
定価：1000円（税別）
送料：別記

学会年報『寄せ場』創刊号

流動する下層労働者・その現状と未来

3月28日刊行!

発売 現代書館